

生き方を探るⅡ 丘を越え行こうよ 口笛吹きつつ

渡 辺 武 志・飯 島 幸 久
高 橋 伸 行・三小田 博 昭
今 村 敦 司・川 田 基 生

【抄録】 本校が先進的に取り組んできた総合人間科で学んだことを基に、自分の生き方をどうするか、興味関心がどこにあるかを追求させるために、上級学校や社会に出ている人の話を聞いたり、似た進路を志す者の考え方を知る機会を設けるなど、自分の生き方の糧とする活動を行わせることで、自分の目標をしっかり持った生徒の育成ができた。

【キーワード】 総合学習 キャリア形成 生き方 進路

1. はじめに

「自分の人生を自覚的に選択する力を育てる」という総合人間科の目標の仕上げをするために、今までの本校での総合人間科や学習等さまざまな活動を振り返り、自分の将来を決める手だてとするのと同時に、これからの自分の生き方に対しての第一歩を踏み出す機会とする。丘の頂上(峠)は、来た道もこれからの道も見渡すことができることから、高校3年生のこの一年間を「丘を超える過程」と位置づけ、自分の未来を、希望を持って選択させたい、自分の進路決定に自信を持って望ませたいという考えから、このサブテーマを設定した。

2. 学年の目標

「自分の進路を自覚的に選択する力を養う」という総合人間科の目標がそのまま学年課題に当てはまる学年である。今までの総合人間科のテーマを振り返り、自分の興味関心がどのように移り変わってきたのか、そしてどのように関連してきたかを考えると同時に、これから先の自分の進路を決めたり、決まった進路に自信を持ったりするための機会とする。自分の進路を決める過程で、どれだけ進路先について調べ、問題意識を持って進路先へ進むかという経験を「キャリア」ととらえると、高3では、フィールドワーク、先輩や働く人の話を聞くこと、インターネットや文献による自分のテーマについての研究などが、自分の進路決定における「キャリア」形成となる。総合人間科3年間を経験することは、自分の進路を自信を持って選択するという意味において重要であると考えられる。

3. 1年間のあゆみ

第1回 4月11日(木) 56限

5限 オリエンテーション、概要説明(各分野の今日的課題例) 図書館

6限 系統別グループ分けアンケート、「進路」に対する考え方アンケート実施 各HR

内容 今年度の総合人間科は、個人研究で進めることと、自分の進路や、今までの総合人間科で調べてきてさらに興味を持ったことなどをテーマとすることなどを説明し、自分がどの系統(文学、語学、国際関係、社会学、経済、理工、医歯薬、福祉、心理、体育、芸術など)で研究をするかを決めた。なお、グループは以下の6つとした。

1. 人文・教育系統 担当今村先生
2. 社会科学系統 担当川田先生
3. 理学・工学系統 担当渡辺先生
4. 農学・医、歯、薬系統 担当高橋先生
5. 外国語国際公務員等系統 担当三小田先生
6. 家政・芸術・体育系統 担当飯島先生

目的 同じ系統のグループを作ったのは、自分の進路や興味があるテーマで研究をする際に、討論がしやすいことや、似たテーマを追求するもの同志が集まり討論することで、違う視点が見えてくることをねらったものである。

第2回 4月25日(木) 6限

S3各HR、地学教室、第2総合、美術室
グループ・担当教官発表、チームリーダー、チーム名決定、外部講師、フィールドワーク先情報交換

内容 アンケートを基にグループ編成をして、そのグループごとに担当教官を決め、代表などを決めた。また、関連フィールドワーク先を資料として提供したり、話を聞きたい外部講師の希望を聞いた。

目的 担当教官制を導入することで、きめ細かなテーマへのアドバイスができるからである。外部講師を呼ぶのは、主に社会に出て大学で学んだことがどのように生かされているかとか、学生時代に学ぶべきこ

とは何かを、現場にいる人から生の声を聞く機会とするためである。

第3回 5月2日(木) 6限

S3各HR、コンピュータ室、図書館
フィールドワーク準備、外部講師検討

内容 自分の研究テーマに従ってフィールドワーク先を検討すると共に、自分の進路先や研究テーマに関してヒントをもらえる外部講師の人選をする。

目的 自分の研究テーマの内容をはっきりさせないとフィールドワーク先に依頼することができない。ある意味では、自分の問題意識を確認する作業でもあり、フィールドワークに出かける前の事前学習の課題を見つける場でもある。

第4回 5月9日(木) 5・6限

S3各HR、コンピュータ室、図書館
フィールドワーク準備、外部講師検討

内容 前回の続きで、引き続きフィールドワーク先や事前学習などの時間にした。また、フィールドワーク先が決まった生徒に対しては、依頼状の作成や交通経路の確認の時間とした。

目的 事前学習は時間をかけて問題意識やテーマ学習をするためがあるので、授業時間内に限らずに研究させるが、担当教官との打ち合わせや指導時間に限りがあるため、十分な時間をとった。

第5回 5月23日(木) 6限

S3各HR、コンピュータ室、図書館
依頼状完成、外部講師検討

内容 引き続きフィールドワーク先の検索や準備をした。なお、アポ取りの電話や依頼状をどのように書くかについては、本校国語科製作の表現テキストを参照して行った。

目的 アポ取りの電話のかけ方や依頼状の作成は、ある意味社会に出ても必要な力となるので、できるだけ丁寧な指導を心がけた。

第6回 5月30日(木) 5・6限

フィールドワーク

内容 午後に1カ所事前に決めたところにフィールドワークに出かけた。大学の研究室や事業所、各種団

体の所に話を聞きに行った。

目的 自分の知識や事前学習ではわからない内容の話を伺わせると共に、話を聞くときの礼儀や態度を身に付けさせたり、メモを取る習慣をつけさせるなど、目的はさまざまである。

第7回 6月6日(木) 5限 S3各HR

お礼状書きと報告会準備

内容 フィールドワーク先に訪問のお礼状を書く。随時国語科作成の表現テキストを使う。また、フィールドワーク報告会のためのスピーチ準備も行う。

目的 自分の行ったフィールドワーク先で何を知ることができたかまとめさせると共に、お礼状の書き方に慣れさせることも目的としている。また、報告会のまとめでは、スピーチをさせることにより、物事をうまくまとめて発表する力を付けることができる。

第8回 6月20日(木) 5・6限

S3各HR、地学教室、第2総合、美術室
フィールドワーク報告会、自己評価、相互評価、
教官評価

内容 各グループごとにフィールドワークの報告会を行った。自分の研究テーマについて、フィールドワーク先で何をすることができたかを発表し、自己評価、他人による評価、教官評価をして、成績をつけるデータを得る機会とする。

目的 個人研究では自分の興味関心のあるテーマについては深く学ぶことができるが、より広い視野でさまざまなテーマについて学ぶことができにくいので、グループ内で発表会をすることによって、視野を広げたり、同じテーマの生徒同士で情報を共有することができる。

第9回 7月4日(木) 6限

S3各HR、地学教室、第2総合、美術室、放送室、第1会議室、図書閲覧室等
学外講師交流グループ分け、役割分担

内容 話を聞きたい学外講師の希望をとり、グループを作って司会や記録など、進行手順を確認する。なお、講師については、基本的には各研究グループで2人呼び、どちらかを選択するが、特に自分の研究テーマに近い人が他のグループの講師になっているときは、他のグループの講師の話を聞きに行っても

良いこととした。

目的 仕事の現場にいる人からの角度で、勉強すべきことや役立つことなどを話していただくことにより、自分の進路や研究テーマが単なる理想論に終わらないよう、多面的な視点を生徒が得る場とするために設定した。

第10回 7月11日(木)56限

S3各HR、地学教室、第2総合、美術室、放送室、第1会議室、図書閲覧室等

グループ別講話会

自己評価と感想、9月以後の予定説明(スピーチと集録)

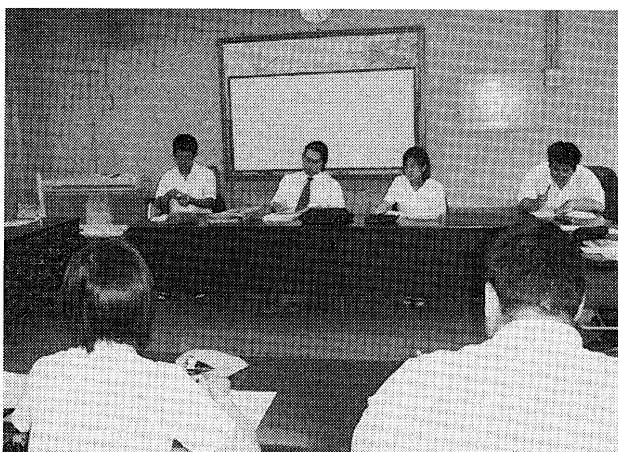
内容 グループに分かれて学外講師の話の聞いたり、質問をしたりした。

講師と当日の様子は以下の通り。

今村グループ

心理/教育 山川隆司さん

河合塾千種校勤務 河合塾中部地区の企画運営
国語の教材開発、編集



旅行/企業人 平出昌広さん

近畿日本ツーリスト勤務 研究旅行添乗



川田グループ

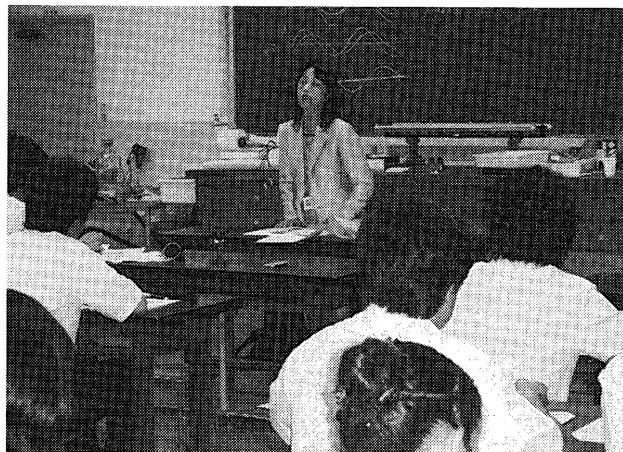
法学/商学 田中克典さん

公認会計士(本校卒業生)



経済/企業人 中澤久美子さん

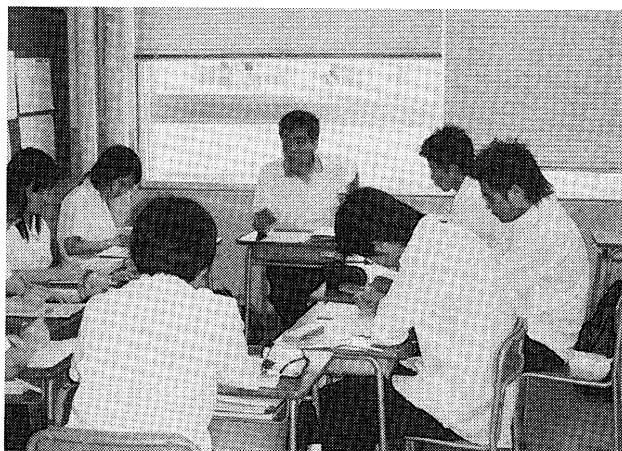
ジブラルタ生命(ライフコンサルタント)



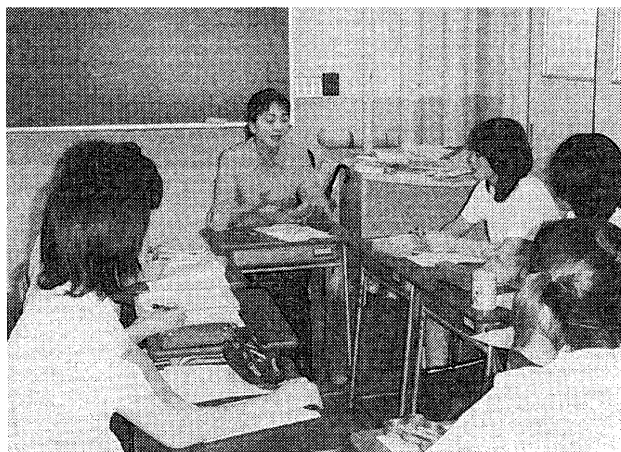
三小田グループ

放送/企業人 稲見真一さん

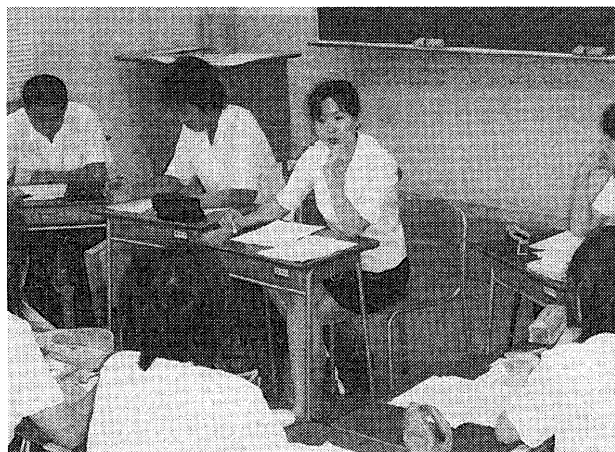
中京テレビ社会情報部(本校20回卒業生)



スチュワーデス／企業人 松田佳奈さん
元全日空国際線客室乗務員

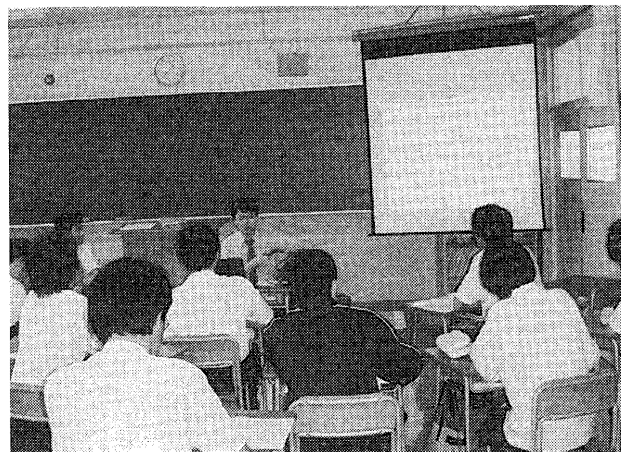


看護／医療 柏原一美さん 聖霊病院看護師



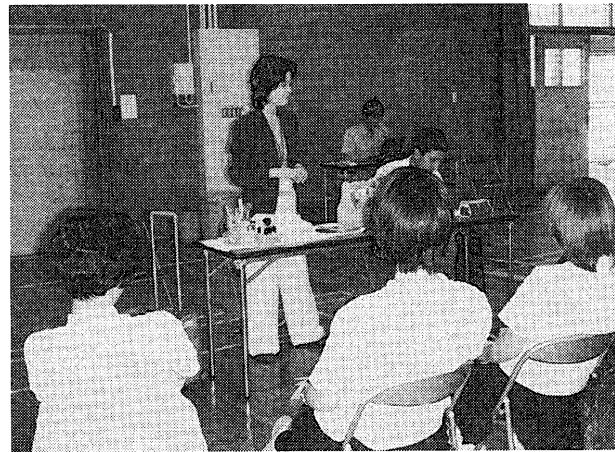
渡辺グループ

工学／情報 栗本英和さん
名古屋大学情報文化学部教授（情報システム）



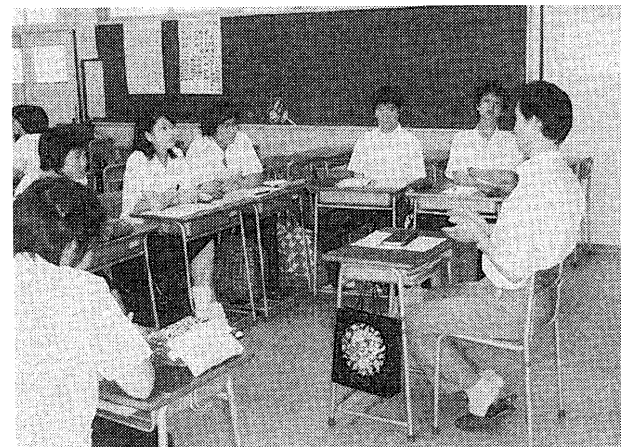
飯島グループ

芸術 木村純子さん
元タレント（NHK、FM愛知、サンドラッグCM）
ヒロタカネイル（ネイルサロン）勤務（本校卒業生）



高橋グループ

農学 松田 幹さん（応用分子細胞生物学）
名古屋大学農学部応用生命科学講座教授



体育／企業人 道家 歩さん（31回卒業生）
（株）グランパスエイト社員 コーチ経験者



第11回 9月26日 スピーチ原稿・集録原稿執筆準備(I)

スピーチは 生き方・進路について考えたことなど、
自分史にこだわらない
※現代文の授業とタイアップして進める。

内容 グループ別で研究成果を共有するためにスピーチ
を行う。また、研究集録としてまとめるための準備
も合わせてする。

目的 スピーチ原稿を考えることにより、研究集録の論
をはっきりさせることができる。また、学びを共有
するために、グループ内スピーチを行う。

後期 二学期後半

第12回 10月17日 スピーチ原稿・集録原稿執筆準備(II)

内容 スピーチ原稿を作成し担当教員に見せて推敲する
と共に、どのような順番で研究集録を書くかについ
ても考え、教官の指導を受ける。

目的 国語の表現にも密接に結びついた授業である。現
代文の授業でも、表現に関する注意事項を取り扱っ
た授業を行い、連携した内容を行うことによる相乗
効果をねらう。

第13回 10月31日 系統グループ別スピーチ実施

自己評価・相互評価・教官評価
全体スピーチ代表者の選出

内容 各グループごとで今まで追求してきたテーマにつ
いて、スピーチを行う。自己評価、他人による評価、
教員による評価を行って成績をつけるデータをとる
機会とする。また、各グループの代表スピーチ者を選
ぶ。

目的 発表する機会を作り、質問を受けたり評価されたり
するにより、自分だけで考えたことを客観的に見
つけ直し、視点を広げる機会とする。

第14回 11月14日 全体スピーチ実施

(この間必要に応じてLT時に絵人、報告書執筆)

内容 各グループの代表18名が全体の場でスピーチをす
る。

目的 今までは各グループごとの学びを共有してきた
が、さらに範囲を広げた共有の場を設定すること
により、学年全体がより広い視点を持って物事を考え

ることができるきっかけを与える場とする。

各グループ代表者と発表テーマは以下の通りである。

- ・浦野 千春 「社会学を学ぶということ」
- ・中村 浩之 「僕のやりたいこと」
- ・田原 瑞絵 「マスコミのファンタジー」
- ・浅野 慧 「ユーザーインターフェイス」
- ・宮野 聖史 「目標」
- ・清原 菜那 「表現者」
- ・谷 花菜子 「将来」
- ・寺田 智香子 「私の生き方について」
- ・伊藤 知紘 「ユーモアとペーソスとけれんみ」
- ・西浦 碧已 「大学に入って」
- ・中嶋 健人 「自分の考え方の基礎とあとこれからの自分」
- ・吉野 良 「これから僕がすることについて」
- ・磯部 真与 「自分の将来と心理学」
- ・野村明日美 「将来の夢と私の生き方について」
- ・松岡 本樹 「100回に1回」
- ・安部 良 「航空宇宙の夢」
- ・服部 陽佐 「私の生き方」
- ・竹内久美子 「今までの歩みとこれから」



第15回 12月12日 報告集(研究集録)原稿完成

スピーチ原稿を骨子に書き上げる
自己評価・感想

内容 研究集録原稿を提出すると共に、今までの取り組
みについて自己評価をして、成績を出す際のデータ
とする

目的 この教科は、自己評価、他人による評価、教員に
よる評価の3つの評価によって総合評価を出す。他
人による評価を参考にさせながら自己評価をさせる
ことにより、他人にも自分の努力をわかってもらえ
るような表現ができたかを考えさせるなど、自分を
客観的に見つめる機会とさせたい。

特別プログラム

2月6日 中1, 2年生向けの「高3生に学ぶ『生き方を探る』講演会」

内容 中1, 2年の生徒に対して、総合人間科を6年間学んできて得たことを後輩に伝える。

目的 高校3年生の6年間の学びを後輩にも共有するため。

当日は、2月6日の時点で進路が決まっている附属中学出身者の中から4名選に講演会を開いた。特に、「後輩に伝えたいこと」の話は、総合人間科を学んで良かったことを率直に聞くことができた。話をしたのは、以下の4名である。

- ・高3 B 野口 舞さん
- ・高3 C 寺田智香子さん
- ・高3 C 中村沙弥香さん
- ・高3 C 原 康晃君



4. 課題と展望

本校の高校3年生総合人間科の授業の流れは、このところあまり変わっていないので、その部分についての考察はここでは行わない。本年度大きく変わった点や、他校での総合学習に実施開始を受けて、強く感じたことについてのみここでまとめることにする。

まず昨年と違ったところだが、学校5日制になったことである。これにより、土曜の午後が調べ学習などに使えなくなり、授業を進める上で大きな支障となった。特に研究集録の執筆を家に持ち帰って行わなくてはならなくなったことは、生徒にとって負担感が増したのではないかと考えられる。内容を削減したり、夏休みを使うなど、新たな取り組み方を考えなければならない。

次に、他の高校が総合学習を始めることになったが、

依然として受験勉強の時間に費やし、総合学習に価値を見いだそうとしていない現状がある中で、本校の総合人間科の取り組みから取ってその価値を一言で言うならば、「自分で進路を考える場を与えた」ということができよう。例えば、特別プログラムの中で生徒が話した内容には、

「自分の未来になりたい職業の所にフィールドワークに出かけたら、自分の思っているところと違っていた。自分の夢を否定されたようで、そのときはつらかったが、はやく違う夢を探し始めることができた良かった。」と語っていたり、

「6年間テーマもバラバラで一貫していなかったけれど、そのとき興味を持ったことを調べることは無駄にはならないと思うし、将来を決めるきっかけとなったときもあった。」

と語っていたりした。さらには、

「自分が大学で学ぶ前に、自分のやりたい職業について、どのような問題点があるかを知り、問題意識を持って学ぶことができる大学を選びたかった。」という生徒がいたのである。自分の成績で入れる大学を選ぶことで苦勞している普通の高校生に比べると、何と理想的なキャリア形成ができていることか。総合学習の成果がこの生徒に具現されていると行っても過言でないと考える。多様な価値観や個性を持った生徒に対して、きめ細かく対応した総合学習を今後とも進めていきたい。

もっとも、すべての生徒がこのようではないし、総合人間科が嫌いな生徒もいるのも確かである。そして、その生徒は学力が低いかと言えばそうでもない。与えられた問題に対しては取り組むが、自分で考えて切り開いていくことが嫌いな生徒が、総合学習を苦手としている。これはある意味では学力の危機である。本来、人間はわからないこと、おもしろいことに興味を持って追求してきたからこそ、現在の進歩があったはずである。「意欲がないこと」に対しては、もっと別の次元の支援、指導が必要であると思われる。